



も どり と 人 婦

號 五 第 卷 五 第

駱 駝 追 ひ

つらき

やまとの翁

大勢おほいせいの中で、たった一人ひとりっ切り
の子供こどものアーは、他の人ひとと同おな
じ様に、喉のどが渴かいて堪たりません
でした。其晩そのばん、水筒すいびんに残のこって居ま
った最期さいごの一滴いちつで、やっと唇くちびるを

潤うるほしたものと、さて明日あすは如何どしたものと、心配こんぱいせずには居ゐられませんでした。

夜よるになると、アリーは、もう疲れ切きって仕舞しまって、「綿毛わたげ」の側そばに横よこになるのが嬉うれしくって、其儘そのますやくと眠ねむってしまひました眠ねむったは眠ねむったが、まだ夜明よみかにもならない中うち、何かしら話わなし聲こゑがするので、不圖ふと目を覺さされました、何なんの話はなしか知らんと思おもって、耳みみを澄すまして聞きいて居ゐると、隊商たいしやうの長かしらが、誰たれかに話はなして居ゐるので、此上このうへ水みづを見付みけることが出来でない上うへは、明日あすになったら、一匹いっぴきの駱駝らくだを殺ころして、其胃袋そのゐぶくろの水みづでも飲のまねばならぬといいって居ゐるのでありました。

これは砂漠さばくの旅行りょぎんでは、時々ときときあることとして、駱駝らくだの胃袋ゐぶくろの中なかに

は、澤山な水がたまつて居る。一度に澤山水を飲んで、夫から何日もく水なしにやっけて行ける様に、駱駝の胃袋が出来て居るのであります。ですから、アリーは二人の話を聞いてもさほどには驚きもしませんでした。然し「あの子供の駱駝を殺さうじゃないか」と一人の隊商が言い出したのを聞いては、さすがのアリーも、吃驚して用心せずには居られませんでした。そこで、よくく氣を落ちつけて、じつと聞いて居ると、二人はこういつて居ます

「他の駱駝は、どれもこれもたちがよくつて、價も高いから、殺すのが惜しいや、夫に、あんな小さな子供が駱駝を持って居たからつて、別に何にもなりやしないじゃないか……あの子に取つて見た所が、喉が渴いて皆と一所に死んでしまふよりは、駱駝の殺

される方が餘っぽど得といふもんじゃない

と、いって、とうく明日の朝いよく水が見付からん時は、アリの綿毛が殺されることに決まりました。これを聞いてから、アリのほうはもう眠り所の騒でない、つらくつらく胸が一杯になつて来た。が、夫と同時に、非常な勇氣と決心も出て来ました。そして自分で、「なーに、己の綿毛なんか殺されるもんかお父さんは、綿毛を連れて来いって、自分に言ひ付けただのに、自分獨りで、行つたらお父さん所へ行つて合はず顔がないじゃないか、よし、く此上は、大勢と分れて、自分獨りで、路を探して行かうときめて、さて、大勢が寢鎮つたのを見計らつて、そつと、綿毛の首を叩きますと、「綿毛」は、ひよっこりと目を覺ましました。そこで

空虚くうこの袋ふくろだの水筒すいとうだのを脊中せななに結び付けて、駱駝らくだの脊せの上に跨またり、そつと合圖あひづをすると、駱駝らくだは忽たちまち起き上あって歩き出だしました。そしてトットトットトットと、軟ひなな砂すなの上うへを進まんで行ゆきます。夜中やちゆうなもんですから、空氣くうきは冷ひきつて、氣分きぶんもよい、一足ひとあし毎ごとに、アリーは氣きが強つよくなつて來きます。空そらを見上みあると、一面ひとめんに星ほしが輝ひいて居ゐる、二人ふたりの道案内みちあんないといふのは、この外ほかにありませぬ。アリーは北極星ほくきょくせいのことも知しつて居ゐれば、お日ひさんが沈しづむと、いつも西にしの空そらに顯あらはれる星ほしも心得こころえて居ゐますから、其星そのほしを右みぎに見みて行ゆけば必かならず南みなみに行いつて居ゐると信しんじて居ゐます。さてだんく行く中ちゆうに、夜よが明あけました。お日ひさんは砂漠さぼの端はしから出でて、だんく高たかくさし上あつて來きました。頃ころはアリーも、だんく疲つかれて來きて、喉のどが渴かいて來きて、殆ほとん

と「綿毛」から落ち相にもなつてきました。さて、お父さんやお母さんのことを思ひ出すと同時に、勇氣を起して活潑にやつて行きます。

お日さんは今や眞中に昇つて來ました。丁度其時分アリーは遙の遠方に椰子樹の見える様に思ひました。が「綿毛」の目にも、夫が見えた様でした。何故かといふに、「綿毛」は、其時から、急に歩き方が早くなつたからです。

夫から、ほんの少しの時間が経つてから、アリーはとうく一つの草地に到着しました。これは、前に申した砂漠の島の島でありまして、丈の高い青々した草や、椰子樹が澤山生えて居て、今まで、砂の他には見ることが出來なんだ目には、どんなに奇麗だか知れ

ません。アリーはすぐ駱駝から跳び下りて、いきなり水漕りを探
し出して、水筒にすくうては飲み、すくうては飲みして居ると、
「綿毛」は又長ひ首をさし出して、グイグイ貪り飲んで居ます。やけ
る様に渴いた喉も潤ほされた後で、アリーと「綿毛」とは、大きな椰
子樹の下に横になったが、疲れと安心とで、さも心地よく其儘眠
つて仕舞ひました。

眼が覺めると又アリーは非常に元氣ついて、そこいらの椰子樹か
ら椰子の實をとって食べるも、「綿毛」は、草だの木葉などをむし
つて食べて居る、其中に、アリーは、其邊の草が大層ふみ荒され
て居るのを見て、何でも、これは近い中に、他の隊商が此處で休
憩したのに違ないと考へ出しました。それで又非常に元氣ついて、

急いで、駱駝に跳び乗って、又南へくと進ませて行きました。日は今西に沈みました。星は前の通りアリーを案内して居ます。然しだんく行くにつれて、お腹は空く元氣はなくなる、其中遙遠方に、隊商の焚いて居る火影が見えた時の、アリーの喜ひといつたらまあ、どうでしたらう。氣も心も勇んで、アリーは間もなく其處に着きました。そして綿毛から下りて、手綱を取って引張って参りまして、火の周圍に坐って居る、隊商の側へ来て、残らず今迄のお話をして、どうか仲間に加へてくれと頼みました、そしてお母さんから頂いたお金を出して、少し許りの食物を買ひました。

大勢の隊商は、アリーのお話を聞いて、悉皆感心して仕舞つて、

殊に、自分の駱駝を助けたアリーの勇氣を賞めないものはありませんでした。それだもんですから、喜んで仲間に入れて夕食を一所にして、いろくくと親切に世話をしてくれます。夕食が済んで仕舞ふと、アリーは、ほつく眠くなってきました、しばらくする中に、「綿毛」の側に横になったなりとうく眠って仕舞ひました。所が、丁度、アリーが楽しい夢を見て居る真最中、忽ちガランくといふ鈴の音で目を覺まされました、起きて見ると、これは南の方からやってきました、たつた今、こゝについた他の隊商でありました。そこで、今來た隊商等は、大勢をこいらに坐って、夕食の出来るのを待って居ると、其中の幾人か、アリーの眠って居た火の側へやってきて、灰をかき起しては新らしい薪をさしくべて、

それからお米を煮る用意をして居ます。アリーは一度目を覺まして見て居ましたが、今や更に目を閉ぢて眠らうとした丁度其時、耳元に響いた聞きなれた聲に、又はと目を覺しました。耳を澄して立ち上つて、そして、今燃え上らうとする火の光が、其周圍に立って居る駱駝追ひの顔を一々照らすのを待つて居ます。間もなく火が燃え上つた、そして丁度其上にかゝんで居た一人の駱駝追ひの顔を照らしたと思ふと、どうでせう、それはまがいもないアリーのお父さんでした。

アリーのお父さんは、商賣先でアリーのくるのを待つて居ましたが、あんまり遅いので、屹度手書の間違でもあったのだらうと考へて、とうく一人で家に歸ることに決めて、折から、家の方へ

行く隊商たいしやうがありましたから、夫それと一所いっしょになつて、今丁度いまちやうどこゝまで來た所きたところでした。

私わたしはこゝに、この二人ふたりが思おもひがけずに出遭でつた喜よろこや又また、お父ちちさんが、アリーがたつた一人ひとりで、さまゝくの危あやしい目めに出遭でつたお話をはなし聞いた時ときの満足まんぞくを、とても十分じゅうぶんにかき顯あらはすことが出來でません。それから、大切だいじな綿毛わたげが、勇いさましい息子むすこに依よつて助たすけられた事こともお父ちちさんに取とつては大層たいそうな喜よろこびでした。

さて、明朝あくるあさになつて、大勢おほい一所いっしょに又家またうちの方に旅行りょぎんをつゞけましたが、皆みんなの中でアリーのお父ちちさん程ほど、嬉うれし相そとに見みえた人ひとは一人ひとりもありませんでした。

めでたしく